



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 80 号 2020 年 2 月 12 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

<第 27 回大会委員長挨拶>

小沢一仁：青年心理学会第 27 回大会を終えて 1

<特集：日本青年心理学会第 27 回大会>

(大会参加者より)

中村悠里恵：青年心理学会第 27 回大会に参加して 2

大久保智生：久しぶりの緊張感と清涼感：第 27 回大会に参加して 3

齋藤 信：日本青年心理学会第 27 回大会に参加して 3

関森真澄：青年心理学の視座を支える切り口を学んだ学会発表 4

(国際交流委員会企画シンポジウム参加者より)

溝口 侑：国際交流委員会企画シンポジウムに参加して 4

白井利明：石岡丈昇氏の社会移行研究が示した国際交流の核心 5

都筑 学：異種格闘技の魅力 5

(名誉会員挨拶)

後藤宗理：名誉会員に推薦されて 6

速水敏彦：青年心理学と私 6

(学会賞受賞者挨拶)

風間惇希：第 9 回学会賞を受賞して 7

<書評：私のおすすめ、この一冊>

登張真稲：フランス・ドゥ・ヴァール（著） 柴田裕之（訳） 紀伊國屋書店（2010 年刊）

『共感の時代へ 動物行動学が教えてくれること』 7

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ 8

事務局からのお知らせ 8

<第 27 回大会委員長挨拶>

青年心理学会第 27 回大会を終えて

大会委員長 小沢 一仁（東京工芸大学）

このたび 12 月 21 日（土）・22 日（日）に、第 27 回大会を東京工芸大学中野キャンパスで開催いたしました。本学での開催は、当時の大会理事の若松養亮先生から第 26 回大会の開催を打診されましたが、学内事情のため我が儘を申し上げて、今大会の開催を承った次第です。今大会には、100 名あまりの会員の参加がありました。こちらの不手際がありつつも、ご参加頂いた会員の方々のご協力に感謝いたします。

今大会を振り返りますと、招待講演として竹田青嗣先生（大学院大学至善館教授・早稲田大学名誉教授）をお招きしました。講演後も竹田先生への質問が活発になされました。また、研究発表 18 件とともに、研究委員会、国際交流委員会、自主、準備委員会の各シンポジウムが行われました。総会では、後藤宗理先生、速水敏彦先生が名誉会員となりました。

今大会を盛り上げて頂いた、研究発表者、シンポジウムの企画者、話題提供者及び指定討論者の先生方に感謝いたします。そして、大会を運営する側に回ってみると、研究発表での

座長の先生の重要性がよくわかりました。座長をお引き受け頂いた、伊藤裕子先生、田中健夫先生、小塩真司先生、中間玲子先生、溝上慎一先生、杉村和美先生、小高恵先生には、厚く感謝いたします。

また、今大会では、事前の予約参加のお願いと期限の延長についての ML での発信、研究発表・シンポジウム・講演 PR の大会 HP での掲載、研究発表での座長希望を試みました。これらの試みの実施につきましては、学会事務局の三好昭子先生、大会理事の山田剛史先生には、大変お世話になりました。改めて感謝いたします。

最後に、今大会は、高木秀明先生（横浜国立大学当時）門下の橋本和幸先生、安藤嘉奈子先生、松島公望先生、内田洋子先生が運営スタッフとなり開催しました。身内にお礼を表すことは場違いかもしれませんが、このチームがなければ開催することができませんでした。高木先生はじめ、このチームの各メンバーに改めて、感謝します。

次回の大会は、大会委員長の浦上昌則先生により南山大学での開催となります。次回大会の成功並びに、本学会の益々の発展を願っております。

<特集> 日本青年心理学会第 27 回大会

昨年 12 月、東京工芸大学中野キャンパスにて [日本青年心理学会第 27 回大会](#) が開催されました。例年よりも遅い時期の大会開催となりましたが、当日は多くの会員・非会員が参加し、活発な研究交流が行われました。今回は、大会特集号ということで、大会に参加された先生方に加えて、名誉会員となられた後藤先生と速水先生、論文学会賞受賞者の風間先生にもご執筆いただきました。読み応えのある内容になったと思います。ご執筆いただいた皆様、ありがとうございました。

(担当：家島明彦・本田周二)

<大会参加者より>

青年心理学会第 27 回大会に参加して

中村 悠里恵（和光大学大学院社会文化総合研究科）

今回、日本青年心理学会第 27 回大会にて、研究発表をさせていただきました。今大会で青年心理学会に参加するのは 3 回目、発表させていただくのは 2 回目となりました。3 回目ともなると顔を覚えてくださった方が多くいらっしやって、お声がけいただきました。学会に参加することそのものが、学生の私にとってはいい経験の場であるとともに非常に緊張する場でもあるので、先生方の温かいお言葉に励まされました。

今大会での発表内容は「青年期の恋愛に関するリスク認知の発達の变化」で、何人かの先生方からご質問や大変貴重なコメント等をいただきました。青年心理学会は口頭発表のみの発表形式となっていますが、45 分間の発表時間で、研究内容について詳しい説明ができ、また質疑応答にも十分な時間を確保できました。たくさんの先生方に意見を頂ける、貴重な機会であると思います。データの収集の仕方、分析手法、分析についての考察など、多くの視点からのご意見・ご指摘をいただきました。自分と研究テーマが重なっている先生方だけでなく、普段はあまり恋愛をテーマに扱っていない先生方からもご意見をいただき、新しい観点を取り入れられることは、研究を進めるにあたって、ありがたいことであると考えています。また、他の先生方の発表を聞くことも、普段自分が行わない分析手法や、新しい観点を取り入れられ、いい刺激になったと思います。

最後になりますが、大会の企画、運営をしてくださった皆様に心から感謝申し上げます。また、ニューズレターに寄稿する機会をいただきまして、ありがとうございます。

久しぶりの緊張感と清涼感：第 27 回大会に参加して

大久保 智生（香川大学）

一度も大会に参加したことのない幽霊会員（そんな言葉があるのかわかりませんが）になっていましたが、昨年度の京都の第 26 回大会で初めて青年心理学会で発表しました。これまで学会発表は数えきれないくらい行ってきました（多忙もあり、全く把握できておりませんがたぶん 200 は軽く超えている気がします）ので、その延長でなんとかなるだろうと軽い気持ちで発表を申し込みました。当日、会場に行ってみるとびっくりしました。大御所がずらっと並んでおり、的確なコメントをされ、さらに私の以前の研究にまで言及され、久しぶりに冷や汗をかきました（正直、なめてました。すいません）。そして、私の返答もしどろもどろ。結果は気持ちのいいくらいの敗北（そもそも勝ち負けはありませんが）。こんな経験は院生の時以来でした。何より、久しぶりに緊張を覚えました。その一方で、久しぶりにすっきりというか、すがすがしい気持ちにもなりました。このところ感じるもののなかった真剣勝負がそこにあったからです（というと、怖いイメージがあるかもしれませんが、良い意味で皆さん「本気」だということです）。

昨年度は敗北しましたが（もう一度言いますが、勝ち負けはありません）、そのリベンジと思い、今年度も発表しました（昨年度よりは自信があるテーマで）。まず座長の先生が私の研究のニュースまでチェックされており、今年度もまず、冷や汗をかくところから始まりました。そして、今年度の発表に対しても、ポスター発表では味わえない的確なコメント。結果は言いませんが（しつこいですが勝ち負けなどはありません）、1 年ぶりの緊張感と終わった後の清涼感でした。2 回しか参加していませんので、的外れかもしれませんが、皆さんが「本気」であること、そこに青年心理学会の大会の魅力があるのではないのでしょうか。これほど的確なコメントをもらえる機会はあまりありませんので、自分が若手研究者なら毎年発表したいと思います。中堅となった今（気持ちは若手ですが）、来年度も緊張感と清涼感を求めて発表したいと思います。そして、真剣勝負の口頭発表は発表していても聞いていても楽しいので、来年度も皆さん「本気」でお願いいたします。

日本青年心理学会第 27 回大会に参加して

齋藤 信（鈴鹿大学）

2019 年 12 月に開催された第 27 回大会に参加しました。当日は新幹線で東京駅に着き、中野坂上駅で先生方とご一緒して、成願寺を右手に見ながら、東京工芸大学中野キャンパスに参りました。

私は第 1 日目午前に、「職業の選択に影響を与えた大学時代の経験—卒業生への調査から—」の研究発表を行いました。朝早くのプログラムでしたが、ベテラン・若手を問わず、多くの先生方がご来場下さいました。発表後の質疑応答では、研究の背景、研究デザイン、職業選択・大学教育に関する時代背景の違いなど、多岐にわたる有益なご質問・ご議論を賜りました。共同発表者とともに、ぜひ今後活かしていきたいと存じます。

同じく第 1 日目の午後には、竹田青嗣先生の招待講演「現象学による心理学の哲学的基礎—現代社会における学問の危機を越えて—」に参加しました。講演では、西洋哲学の基礎から、哲学・科学・心理学・宗教学などの学問領域の関連について、分かりやすく解説して下さいました。私も、高校の倫理の授業から哲学に興味があり、心理学への関心につながっている部分があるので、大変興味深くお話を伺うことができました。

第 2 日目には、自主シンポジウム「公認心理師時代の青年心理学」に参加しました。公認心理師の基本的な情報と最新の動向、特に、公認心理師資格が各大学の教育とどのように関わってくるのか、また公認心理師試験において青年心理学がどのように取り上げられているのかを知ることができました。

私にとって、現在取り組んでいる研究テーマへの向き合い方、過去から現在に至る学問への関心、さらに今後の心理学の動向について、考えるためのよい機会となりました。大会に参加させて頂き、誠にありがとうございました。今後ともよろしく願い申し上げます。

青年心理学の視座を支える切り口を学んだ学会発表

関森 真澄（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

私は、日本青年心理学会第27回大会にて「アイデンティティ統合・混乱の感覚と心理的健康の関連は、疑似的なものか否か」を検討した研究の発表をさせていただきました。私は、本発表が青年心理学会大会で初めての発表であると同時に、学会で口頭発表をすることも初めての経験でした。そのため、発表前日は、私の発表を楽しんでいただけるか、気軽に質問をしていただける発表にできるか、少し不安を覚えていました。しかし、当日の発表では、多くの方々から忌憚のないご意見やご指摘をいただき、私も様々なことを学ばせていただきました。私の発表を聴きに来てくださった皆様方、誠にありがとうございました。

本発表で私が得た最大の収穫は、青年心理学の視座を支える切り口を質疑応答から学べたことです。私の発表でいただいたコメントの多くは、概念の内容やそれが取り上げている現象を、深く正確に理解しようとするものでした。それまでの私は、量的な研究の知見をベースとした仮説モデルの洗練とその実証に注力するやり方で研究を進めてきたため、概念そのものを見つめる観点こそが自分に足りていないものだ、強く思いました。青年心理学の目的は、青年の心理を理解することと同時に、青年たちの自己理解を促すことだと多くの文献で述べられていますが、「青年心理学の視座は、ひとつひとつの概念に対する深い思索と鋭い洞察によって支えられているのか」と思い知った次第です。

このような自分の課題点を見つけられたのも、50分という多くの発表時間の中で、年齢や領域の壁がなく様々な議論ができるという、青年心理学会大会の特長のおかげだと思います。本発表で学んだ切り口をもとに研鑽を重ねて、さらに面白い研究を行い、今後の青年心理学会大会でも発表をしていきたいと思えます。

最後になりますが、私の発表の座長をご快諾くださった溝上慎一先生(桐蔭横浜大学)、並びに、本ニューズレター執筆の機会をくださった先生方に、心より感謝申し上げます。

<国際交流委員会企画シンポジウム参加者より>

国際交流委員会企画シンポジウムに参加して

溝口 侑（京都大学大学院教育学研究科）

今回の国際交流委員会企画シンポジウム『研究を国際的に展開・発信する意義と課題』に参加して、研究の国際化について自分の考え方を大きく揺るがされたのは、石岡丈昇先生の「研究の国際化は英語での国際発信以上に、日本語での研究を深めることを可能にする」という言葉でした。まだ日本の学会や論文誌に自分の研究を十分に発信することが出来ない自分にとって、青年心理学会を含め、国際交流についてのシンポジウムに参加しているような話を聞いてみても、海外の学会に行って発表することや英語で論文を投稿することというのはどこか他人事のように考えていました。

しかし、自分の研究を世界に向けて発信していくということは、ただ研究が英語になるということではなく、その本質は日本では当然の「問われざる前提」と「日本の研究の盲点」を明らかにしていくことにあるという話を聞いて、自分のなかに研究者としてそのような態度があったらと思うことができました。研究を世界に向けて発信するという前の段階として、自分の研究を英語や他の言語で表現するときに研究のキーワードはどのように表現されるのか、日本とは社会制度も文化も異なる国では分析の結果がどのように理解されるのかということを常に考えていかないといけないと感じました。またそうした視点の相対化という意味では、日本の中にあっても、自分の研究が前提を問うことなく受け入れられる相手に対してだけではなく、様々な共同体に向けて研究を発信し、議論をするなかで理解してもらうプロセスが必要だと気づきました。これからはよりいっそう言葉一つ一つを大切に、丁寧に伝える意識をもって研究に臨みたいと思えます。自分の研究者として態度を見直す有意義なシンポジウムでした。

石岡丈昇氏の社会移行研究が示した国際交流の核心

白井 利明（大阪教育大学）

国際交流委員会企画シンポジウム「研究を国際的に展開・発信する意義と課題ー若者の社会移行を例にー」で、話題提供者の石岡丈昇（とものり）氏（日本大学）が「英語で書くとは何か」と問われ、「日本語で考える時の問われざる前提を問う」と答えた。我が意を得たりだが（白井、2015）、具体的な研究成果をあげておられることはすごいと思った。

石岡氏は、マニラのボクサー志望の若者と住んで一緒に練習を行い、身体をとおして貧困の本質が恐怖であるなどと実感として捉えた。そして、ドイツの若手の研究者どうしで泊まり込みの議論を行い、「住み込み」という形態はヨーロッパでは稀だと知り、「寝て、遊んで、仕事する」という3つの生活領域を分ける障壁がない制度（職住分離＝ヴェーバー；アサイラム＝ゴフマン）から捉え直した。

指定討論者の溝上慎一氏（桐蔭横浜大学）が海外の研究者と英語の論文を書きながらも、テーマでつながっているだけだと話されたことを聞いて、自分の基盤となる国際的学問共同体をもつことの大切さに思いを馳せた。石岡氏の場合、住み込みが稀でない社会にいる研究者だからこそ捉えられた本質が、それとは別の社会にいる研究者との交流から学問知としてのかたちを得たのであろう。国際的学問共同体をもつことは、自分の依って立つ前提に気づかせるだけでなく、国際的な学問知の誕生にも寄与するのである。

もう一人の指定討論者の杉村和美氏（広島大学）が焦点を当てた若者の社会移行についても、刺激をもらった。1950年代日本の（農村から都市に押し出された）住み込み型の勤労青年や若者宿に思いを馳せた。もっと語りあいたいのので、討論の時間を増やして、また聞いてほしい。

白井利明（2015）. なぜ今、青年心理学で国際交流か 青年心理学研究, 27(1), 49–53.

異種格闘技の魅力

都筑 学（中央大学）

第27回大会に参加して、最も印象に残ったのが、国際交流委員会シンポジウムだった。話題提供者の石岡丈昇さんは、マニラのボクシングジムで、トレーニングを積みながら進めたフィールド調査について熱く語った。長身でスリムな鍛え抜かれた身体から繰り出されるパンチは強烈だった。話を聞きながら、モハメド・アリの名言、「蝶のように舞い、蜂のように刺す」を思い出していた。

話題提供を聞きながら思ったことが、二つある。第1は、研究者の姿勢の問題だ。「事實は細部に宿る」と言われる。「若いボクサーのベッドに寝転んだ時に偶然見つけたサイン。それは彼の夢の証だと思った」「ジムに置かれた二つのサンドバックは、練習する二人のボクサーの同期的な動きを引き起こす」。何気ない日常のなかに、重要な本質が刻み込まれている。若いボクサーたちと一緒に暮らし、喜怒哀楽を共にしたからこそ、それを見逃さずに切り取ることができたのだろう。現代社会という大きなフィールドに生きる青年たちは、多様な生き方を示している。それをリアルにとらえるには、青年と向き合う研究者の姿勢を問い直すことが重要だ。そのことを改めて感じさせられた。

第2は、発想の逆転の大切さである。「英語での執筆・発表は、日本語の論文の質の向上につながる」という指摘は、目からうろこだった。「日本語で書くと、『問われざる前提』を省略してしまうことが多い」。確かにそうだと納得。英語での論文執筆時には、「問われざる前提」を突き詰めて考えることを意識化せざるを得ない。その経験が有効なトレーニングとなり、日本語で論文を書くときに生かされるわけだ。日本語論文も英語論文も、前提を問いながらメタ認知を働かせて執筆すると、明晰な論文に仕上がっていくにちがいない。今回得た有益な示唆を、今後の研究活動に生かしていきたいと思った。

青年心理学会に登場した社会学者。異種格闘技のリングは、刺激的で魅力的だった。次のリングに登場するのは誰か。大いに期待したい。

<名誉会員挨拶>

名誉会員に推薦されて

後藤 宗理（梶山女学園大学）

日本青年心理学会第27回大会において図らずも名誉会員に推薦されましたこと、誠にありがとうございました。1970年に名古屋大学教育学部で青年心理学会が開催された時に久世敏雄先生のお手伝いをさせていただいたことが本学会とのご縁になりました。青年心理学会には第1回から参加していましたが、歴代の理事長先生をはじめ諸先生方の末席に加えていただくことになり、恐縮している次第です。

私にとって本学会はもっぱら情報収集の機会であって、積極的に情報発信をしたわけではありませんが、理事のあと理事長を2期務めたこと、その任期中に新・青年心理学ハンドブックが刊行されたこと、理事長が先頭に立つまでもなく若手の理事や会員の方々が主体的に学会の在り方を考えてくださったこと、などが学会の発展につながったと思います。

学会は研究者の集まりであり、研究発表を第一に考えるのは当然ですが、いずれの組織体も管理運営担当がいなければならないことも事実です。私自身、本学会の理事長職就任と現大学への移籍が同時に始まりその後の管理職の遂行と大きな環境の変化に直面しました。大学を取り巻く環境は絶えず変化して、文部科学省や中央教育審議会が各種の答申や指針を公表しています。これらの方針に対して、研究者や教育者としては受け身になりがちですが、最近出された「教学マネジメント指針」では、青年心理学研究者のかかわりが求められていると思います。

青年心理学の一つのテーマは大学生の心理学です。大学生の在り方を青年心理学の立場から理解しようとするとき、文部科学行政あるいは高等教育政策にかかわる立場とは違う視点から高等教育グランドデザインについて考える必要があると思います。教育成果のポイントの一つは、青年の成長実感をどうとらえていけばよいのかということです。

青年心理学研究者に寄せられる期待が一層大きくなることを願っています。

青年心理学と私

速水 敏彦（中部大学）

この度、思いがけず日本青年心理学会の名誉会員にいただきました。まず、推挙いただいた学会の役員および会員の皆様に厚く御礼申し上げます。ただ、私は同時に名誉会員になられた後藤先生のように本学会に著しい貢献があったわけでもありませんので少なからず面映ゆい気持ちです。

私と青年心理学の最初の接点は大学院時代、私の指導教員であった続先生が急逝され、青年心理学が専門の久世先生に指導をしていただくことになった時にあります。大学院時代、久世先生が附属中高校生を対象に社会的態度の縦断的研究をされており、その研究との関りで、日本青年心理学会にも参加させていただくようになりました。大阪教育大学に奉職した際、私の主なる研究テーマは異なっていたにも関わらず、当時、大阪教育大学におられ青年心理学会で活動しておられた原谷先生や秋葉先生に声をかけられ、開西青年心理学会にも参加させていただきました。そこで、津留先生のような青年心理学の大家とも出会うことができ、青年のとらえ方や青年の心理を深く考える楽しさを学んだような気がします。

ただ、私の研究の主なる関心事は教育心理学の動機づけの側面にありました。名古屋大学に戻ってから1度だけ委員長として日本青年心理学会の大会を開催させていただいたことはありますが、その後、青年心理学がご専門の平石先生が名古屋大学にいられてからは学会の主なる仕事も先生にお願いしてしまいました。

しかし、振り返ってみますと、私が取り組んできた学習の動機づけに関する研究の主たる対象は中・高・大学生、まさに青年でした。そのためか、それほど意識することなく青年の動機づけ以外の人格的側面も気になるようになり、その他の青年に関連する分野の書籍や研究にも興味を持っていました。何か新書を書こうと思った時、学習の動機づけを真正面から扱ってもなかなかまとまらず、現代の青年の心性に軸足を置いて書いていく方がおもしろいのではないかという考えが閃きました。15年ほど前、拙著「他人を見下す若者たち」を出

版できたのは長い間、青年心理学会に所属させていただき、潜在的に様々な刺激を受けたことによるが大だと思っています。

<学会賞受賞者挨拶>

第9回学会賞を受賞して

風間 惇希（三重大学）

この度は、「青年期前期における過剰適応の類型化に関する検討」を学会賞に選出いただき、誠にありがとうございます。掲載に至るまでに様々な紆余曲折を経た論文でしたが、まさかこのような栄誉のある賞を頂けるとは思いもよりませんでした。受賞当日は恐縮と動揺のためか、肝心の研究内容について一切言及しないまま挨拶を終えたので、改めて受賞の喜びを言葉にできる機会を頂けたこと、大変有難く存じます。

改めて論文を読み直してみると、その『青年心理学研究』史上稀に見る頁数に我ながら「よくこれだけ書いたな」と感じます。冗長な部分や言葉足らずな部分、論理が不可解な箇所が多分にありますが、この論文の要点は、「過剰適応という概念を整理して捉えること」と「個々の関係の中で生じる現象を区別して捉えること」でした。

その中でも、この論文で最も大事にしたかったのが、「状況」「文脈」「多様性」等の言葉でも説明できると思いますが、周囲の他者との個々の関係を考慮しながら現象を捉えるという視点です。思い返すと、この発想に至る最初のきっかけは、平石賢二先生にご教授いただいた、個人と環境（文脈）の相互作用の中で発達を捉える「発達の文脈主義」という考え方でした。当時は、人の個別具体性を理解し支援する臨床実践の訓練中だったこともあってか、「じゃあ関係ごとに分けて捉えよう」といった浅はかな発想から研究を始めることになりましたが、この論文の査読を通して、区別した現象を青年の発達として考えることや、分けたものを掛け合わせた場合はどのように考えるか、などといった複雑な課題に次々と直面することになりました。今回の論文にもその悪戦苦闘ぶりが垣間見えますが、個性性と一般性の折り合いをどのように実証していくか、この視点は青年の発達を理解するために重要なことだと思いますし、私自身これからも大事にしていきたい視点でもあります。

現在は、障害学生支援というフィールドでまた違った多様性を感じる日々を過ごしていますが、恥ずかしながら少し研究から遠ざかっておりました。今回の受賞を励みに、研究の方にも力を注いでいきたいと思います。最後に、調査にご協力いただいた皆様、掲載に至るまで粘り強くご指導頂いた査読者及び編集事務局の先生方、そして指導教員の平石賢二先生に、厚く御礼申し上げます。

<書評:私のおすすめ、この一冊>

『共感の時代へ 動物行動学が教えてくれること』

フランス・ドゥ・ヴァール（著） 柴田裕之（訳） 紀伊國屋書店（2010 年刊）

登張 真稲（文教大学）

著者は、動物行動学、動物の共感・向社会的行動・道徳性研究の第1人者で、多数の著書は世界中で広く翻訳されており、2007年にはタイム誌の「世界で最も影響力のある100人」に選ばれている。オランダ出身で、現在はアメリカのエモリー大学教授、リビング・リンクス・センター所長。2016年に横浜で開催されたICPにも参加した。

本書では、チンパンジーやゾウ、イルカなどさまざまな動物が仲間同士で慰めあったり、模倣しあったり、協力しあったりする例が、興味深いエピソードとともに多数紹介されている。大きな鏡を使って、ゾウやイルカが鏡に映る自分の姿を認識するのを確認できたこと、動物が人間への共感や慰めを示す場合もあるなどの例も紹介されている。

ドゥ・ヴァールによると、共感や思いやりは、他者が走れば自分も走り、他者が笑えば自

分も笑い、他者が泣き叫べば自分も泣き叫ぶといった身体的同調とともに哺乳類の誕生のころに始まった。その後、進化によって、他者への気遣いや視点取得といった新たな層が加えられたが、外側の最も精巧な層も、原始的な核の部分としっかり結びついているという。

大部分のヒトは、このように動物とも共通する長い歴史を持つ共感や思いやりの能力を持っているが、強欲や競争心、メンツ、誤解や偏見などのために、その能力を発揮しないこともある。本書が出版されたのは、アメリカでオバマ政権が誕生し、大衆の幸福を重視するような政策への期待がある程度現実味を帯びてきた時期であったが、現在では世界中で当時とは正反対の現象が起きている。

共感とは、研究者によって定義が異なると言われ、難しい研究分野の一つだが、ヒトの心の働きや発達、対人関係、適応などにおいて、きわめて重要な意味を持っている。共感についての研究を深め、共感の意義や役割について、心理学の立場からも発信できるとよいと思う。

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

第 72 号より、会員の皆様から意見や要望を募るとともに、自由な投稿・寄稿を促すことにしたとアナウンスさせていただきました。投稿・寄稿ルールについて、再度簡単に説明させていただきます。

- 会員から募集するのは、以下の 5 つです。

① 特集テーマに取り上げて欲しいトピックス 「特集テーマ提案」

随時募集。過去の NL 記事を振り返りつつ、編集委員会で検討し決定します。

② 書評に取り上げて欲しい書籍 「書評推薦図書」

随時募集。原則として最新号発行 1 ヶ月前に集約し掲載します。

③ 書評執筆の希望 「書評執筆希望」

掲載書籍への書評執筆の希望者を、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。該当書籍をお持ちでない場合には献本いたします。

④ 次号の特集テーマに関する投稿の申し込み 「特集テーマ投稿希望」

特集テーマへの投稿希望者は、原則として最新号発行後 1 ヶ月間募集します。

⑤ 会員からの情報や意見の自由投稿 「投稿：会員から」

随時募集。投稿内容が本学会の NL の記事に相応しいかを編集委員会で検討し、掲載の可否を決めます。不掲載の場合は、投稿者に理由を開示します。

- 投稿・寄稿時には、必ず件名を「」内の通りとし、本文の最初にお名前と所属・連絡先メールアドレスをお書きください。

- 書評および特集テーマへの執筆候補者は基本的に以下のように決定します。なるべく執筆希望者を優先しますが、編集委員会において会員の先生方の専門や経歴のほか、最近の寄稿状況を把握し検討したうえで執筆候補者を絞り込み、改めて執筆を依頼します。

- すべての投稿先は、jsyap-nec@googlegroups.com（日本青年心理学会 広報・ニューズレター編集委員会）です。

- 原稿の字数は 800 字程度を原則としますが、電子版なので柔軟に対応いたします。
-

事務局からのお知らせ

I. ワークショップ開催のお知らせ

研究委員会では、2018 年から 2020 年までの 3 年間にわたる長期的テーマを「青年期から成人期への移行の多様性」として、さらなる青年理解に向けた検討を行っていきたいと考えています。

2020 年は「青年に希望はあるのか」を短期的テーマとして、以下の日程・場所でワークショップを開催いたします。青年期から成人期への移行過程の多様化が進む中で、かえって価値観の画一化や経済状況の格差が広がり、特に日本の青年が抱く希望のあり方へ影響しているのではないかという問題意識に基づいています。

・日 程 2020 年 2 月 23 日（日）13：30～16：30（13：00 開場）

・場 所 昭和女子大学 7 号館 6 階 6S02 教室
〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57

<https://office.swu.ac.jp/campusmap/>

※大学正門入口において、守衛が皆様に入構目的を確認させていただいております。「日本青年心理学会ワークショップへの参加」と伝えていただければ幸いです。

・話題提供 都筑 学会員（中央大学）

・内 容 「現代青年における希望の心理学」

※青年は、彼らが生きている時代の空気を吸いながら成長していく。今の時代、青年が希望を抱くことは難しい状況にある。そうした厳しい現実のなかで、どのようにして青年は希望を見出すことができるのか。話題提供をもとに、「青年と希望」について参加者のみなさんと語り合い、希望の発達の意義を心理学的に深めていきたい。

・参加費 無料

※ワークショップ終了後に懇親会を予定しております。

*申込み・問い合わせの詳細は[こちら](#)をご確認ください

2 月15 日（土）までに申込みいただけますとありがたく存じます。ただし、当日参加を妨げるものではございません。

会員のみなさまには、ふるってのご参加をお願いいたします。

Ⅱ. 2019 年度日本青年心理学会研究委員会アーカイブズ企画のお知らせ（期限延長）

研究委員会のアーカイブズ企画の申込期限を以下のとおり延長しました。

このアーカイブズ企画は、研究委員会の共同調査によって収集されたデータをデータファイルとして蓄積し、本学会会員が所定の手続きを経ることで活用できる仕組みです。

・対象データ：2 種類（現代青年の生活時間、現代青年の日常の活動に対する評価）

・申込期限：2020 年 2 月 29 日（土）

・申込方法：「アーカイブズデータ利用規約」を確認した上で、「利用申請書」のフォームに必要事項を入力、押印して pdf ファイルなどで以下のメールアドレスに送信してください。

※研究委員会アーカイブズ企画担当 jsyaparchive@gmail.com

※メールの題目に「2019 年度アーカイブズ利用申請」とお書きください。

※研究委員会アーカイブズ企画担当による審査後に連絡いたします。

会員の皆さまにぜひご活用いただけますと幸いです。

詳細は[こちら](#)をご確認ください。

Ⅲ. 日本青年心理学会第 28 回大会会期についてのお知らせ

日本青年心理学会第 28 回大会の会期が決まりましたのでお知らせいたします。

日本青年心理学会第 28 回大会

・会 期：2020 年 12 月 5 日（土）～6 日（日）

・会 場：南山大学

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

地下鉄名城線「八事日赤」駅より徒歩約 8 分

<https://www.nanzan-u.ac.jp/Information/access.html>

Ⅳ. 学会メーリングリストをご利用ください

現在、電子版ニューズレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなど

の案内を,このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上,
事務局からのみの発信となりますが, どうぞご利用ください。

日本青年心理学会事務局
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
E-mail : seinenshinri@gmail.com
新 Website : <https://www.jsyap.org>
振替口座 : 00940-6-273417
口座名称 : 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。